

能代春慶

—江戸時代から明治期にかけてのデザインの変遷—

齊藤 洋子*

1. 能代春慶の概要

秋田音頭の中で唄われた能代春慶は、秋田県を代表する工芸品の一つである。

起源は、江戸時代17世紀後半といわれている。能代の三輪文右衛門がまとめた「御用当座覚」（能代市1999）によると宝暦から明和にかけて、久保田城や江戸佐竹屋敷に来客接待用の御膳510脚が納められたり、また9代藩主佐竹義和の形見分けとして短冊掛が夫人へ受け継がれるなど（秋田県立博物館2021）、江戸時代には武家に好まれた工芸品であった。その後も、明治、大正、昭和と命脈を保ってきた能代春慶であったが、平成22年に最後の職人11代石岡庄寿郎が亡くなったことで技術が途絶えてしまった。

2. 本論の目的

能代春慶の先行研究としては、『秋田県史 民俗工芸編』（秋田県1962）、『秋田県の諸職』（秋

田県教育委員会1991）、『あきたの工芸』（秋田県教育委員会2007）、『秋田の工芸技術』（秋田県教育委員会1983）、『能代市史 特別編 民俗』（能代2004）などがある。また、『近世漆器工業の研究』（半田1970）では系譜や歴史、技術の伝播などについて研究がされている。しかし、製品のデザインに注目した調査研究はなされていない。

デザインに注目して能代市教育委員会や当館が所蔵している資料を調査すると、大きく分けて2種類のデザインがあることに気づく。江戸時代に制作された簡素で直線的な形状の膳類（図1）と、明治以降に制作された丸みある輪郭線の特徴とした製品（図2）である。色や木目にはそれほど違いがみられないが、全体的傾向としてデザインが対照的だ。そこで本稿では、時代の転換期に生まれた能代春慶のデザインの変化について、秋田藩の御用職人であった石岡庄寿郎と万国博覧会の関わりから、若干の考察を加え整理していきたい。



図1 江戸時代に多く製作された能代春慶（能代市教育委員会蔵）



図2 明治以降に製作された能代春慶（能代市教育委員会蔵）

*秋田県立博物館

3. 江戸時代の能代春慶

「御用当座覚」（能代市 1999）では江戸時代中期から後期に生産された能代春慶の記録を多く確認できる。また「能代春慶塗概観」（半田 1962）では、石岡家 4 代庄寿郎の天保 15 年辰 11 月の「春慶塗将軍家・佐竹家納品関係覚」（石岡文書）について触れられており、納品された製品を確認できる。以下にその納品記事の一部を掲げる。

1	1756 年 (宝暦 6 年)	佐竹屋敷へ 御本膳 二本貫 三拾人前 二御膳 二本貫 四十人前 三御膳 一本貫 六拾人前 足打へき貫なし 二十 へき 三十 縁高 珠ふち二筋付ク三十
2	1766 年 (明和 3 年)	久保田城へ 本膳 四十 二 三十 三 六十 八寸台 六十 足打側 三十枚 御縁高 三十 足無側 二十枚 会席膳 三十
3	1788 年 (天明 8 年)	天明八年申八月中上納仕候 御餐御用ニ付、御膳類 御本膳、二之膳、三之膳 御吸物膳品々都合百四拾品 出来奉上納候節
4	1812 年 (文化 9 年)	御出生様御刀掛・御手拭掛
5	1816 年 (文化 13 年)	御霊屋御尊牌御用御茶湯台 四通 直千代様御用御膳壺通り
6	1820 年 (文政 3 年)	屋形様、友千代様江御印籠 式通
7	1821 年 (文政 4 年)	能代長慶寺江御霊屋御用御 霊供三峯（四膳） 御茶湯台（五膳）

8	1824 年 (文政 7 年)	御姫様御引越御用ニ付御盃 台・御鉢台・御湯口台（各 壺膳）御八寸台（五膳）
9	1827 年 (文政 10 年)	屋形様能代江御泊野之節、 御短冊箱壺ヶ、御印籠壺ヶ
10	1830 年 (文政 13 年)	御蓑盆、御扇子箱、御盃棚、 御筆箱式通
11	1832 年 (天保 3 年)	御膳御用御筆箱御筆軸大中 小御墨台
12	1834 年 (天保 5 年)	御盃台（式拾通） 御櫛（式百枚）
13	1839 年 (天保 10 年)	御若君様御規式御膳類壺通 り御数十四品
14	1844 年 (天保 15 年)	御能御扇子箱、御印籠（各 壺）

出拠：1～2「御用当座覚」（能代市 1999）
3～14「能代春慶塗概観」（半田 1962）

上記によると、江戸時代における能代春慶の器種は膳や三方、鉢台、煙草盆などの一般的な調度品であった。武家の御用として民事に応じず、専ら武家用の製品が製作された。江戸時代に作られたとされている膳や箱類などは、わずかではあるが現在能代市に残されており（図 1）、シンプルなデザインである。

4. 明治時代の能代春慶と万国博覧会との関わり

次に明治以降の能代春慶についてみていく。明治期からの能代春慶は、万国博覧会と関わりながら、大きく姿を変えていく。

明治政府は富国強兵、殖産興業というスローガンのもと、産業の近代化と輸出の奨励を目指した政策を行っていた（伊藤 2008）。その事業の一つに博覧会出品がある。万国博覧会は、展覧会でもあり、品評会でもあり、商品見本市でもあり、即売会でもあった。能代春慶の職人、石岡庄寿郎は内務省管轄の博覧会事務局（以下事務局）から、明治 6 年ウィーン万国博覧会、明治 9 年米國博覧会へ工芸品を出品するよう要請を受けている。

(1) ウィーン万国博覧会（明治6年5月1日から11月2日）への出品

ウィーン万博は、明治政府が初めて公式参加したもので、『澳国博覧会参同紀要』（田中・平山1897）によると、日本の主な参加方針として次のようなものを挙げている。

- ①すぐれた物産を出品して、海外での日本の名誉を高める。
- ②西洋の風土物産、学芸、機械技術を学び、日本の学芸、産業を発展させる。
- ③学芸進歩のために不可欠な、博物館、国内博覧会創設の基礎を整える。
- ④精良な物産を出品して、今後の輸出拡大をはかる。
- ⑤各国の名産品、および各国が求めている物品を調査して、貿易政策の参考とする。

国威発揚、情報収集、技術伝習、貿易拡大などが参加目的であったが、中でも工芸品を展示の主軸にすえていた（伊藤2008）。本県における工芸品部門では「第二課諸務係事務簿 博覧会社及雑ノ部 壱番 明治9年1月～10月」（秋田県公文書館所蔵）によると、7代目石岡庄寿郎が次のような製品を出品している。

- ・春慶塗書棚 但シ棚板五枚四本柱付壱ツ
- ・同雲形棚 但シ棚板五枚竹ノ形地ニ細工柱三本立 壱ツ
- ・同湯呑茶碗台共 拾二通
- ・同凡コップ盃十二入 但シ透台エカフセ蓋付 壱ツ
- ・同八角ノコップ盃十二 八角徳利2本入 但シ透台エカフセ蓋付 壱ツ

上記、ウィーン万博に出品した品目には、雲形や八角、透台などのデザインを表す言葉が含まれる。実際に出品した製品が残されていないため詳細は判明しないが、現存する実物資料とを照らし合わせると、図3のような春慶塗だったと考えられる。江戸時代終了からわずか6年ほどの時期ではあるが、器種やデザインが大きく様変わりしている。

ウィーン万博の日本からの出品物は政府が期待した以上に好評で名誉証状5点、進歩賞牌43点、有功賞牌80点、雅致賞牌1点、表状66点、補

助賞牌5点を受賞した（角山1999）。能代春慶が獲得したのは有功賞牌（図4）である。有功賞は、「製工ノ精妙物品ノ高上ナルニヨリ貿易ノ道ヲ開キシニヨリ益精好ノ器械を用ヒシニヨリ及物品ノ廉直ニヨリテ衆ニ秀デシ者ニ興フ」（森山1897）ものとされ、能代春慶が高く評価されたことがわかる。これを受け、当時ウィーン万博総裁であった大隈重信からは、秋田県に受賞報告の通知が届いている（図5）。



図3 能代春慶製品（能代市教育委員会蔵）



図4 ウィーン博覧会受賞メダル（個人蔵）

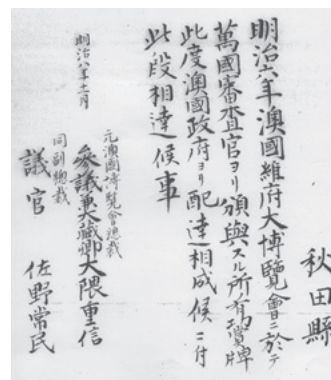


図5 有功賞牌受理の通知
「第二課諸務係事務簿博覧会社及雑ノ部 壱番 明治9年1月～10月」（秋田県公文書館蔵）

(2) フィラデルフィア万国博覧会（明治9年5月10日～11月10日）への出品

ウィーン万博で手応えを感じた事務局は、本格的に海外向け工芸品の受注に着手する。全国の工芸家に働きかけて製品を作らせ、また役人を実際に各地へ派遣して作品を調査させた。遠隔の県には、県の職員に調査を委託する場合もあった（東京国立博物館1997）。その際、前回万博と同等のものを出品したのでは進歩がないので、事務局はフィラデルフィア万博に向け、改良の成果を見せるように全国の出品者たちへ要求した（國2010）。石岡庄寿郎にも事務局から出品の依頼が届いており、出品作を何にするかについて、事務局と石岡は何度か文書を交わし相談している。

出品作品が決定するまでの経緯について「第二

課諸務掛事務簿博覧会及雑ノ部明治7年1月～明治8年12月」（秋田県公文書館蔵）により時系列で整理する。

①まず、明治8年4月23日に内務省から秋田県（以下県）へ文書が通達された。フィラデルフィア万博へ出品するため、春慶の職人に製品を用意させるよう秋田県に依頼した内容である。春慶は前回のウィーン万博にも出品しているが、フィラデルフィア万博では一層精巧にできるよう県で力添えをしてほしいと念を押している。

②明治8年4月30日迄には、事務局から春慶の図案が届く。春慶が19種類書かれた注文書であり、製品にはそれぞれ図面が添付されている（図6）。

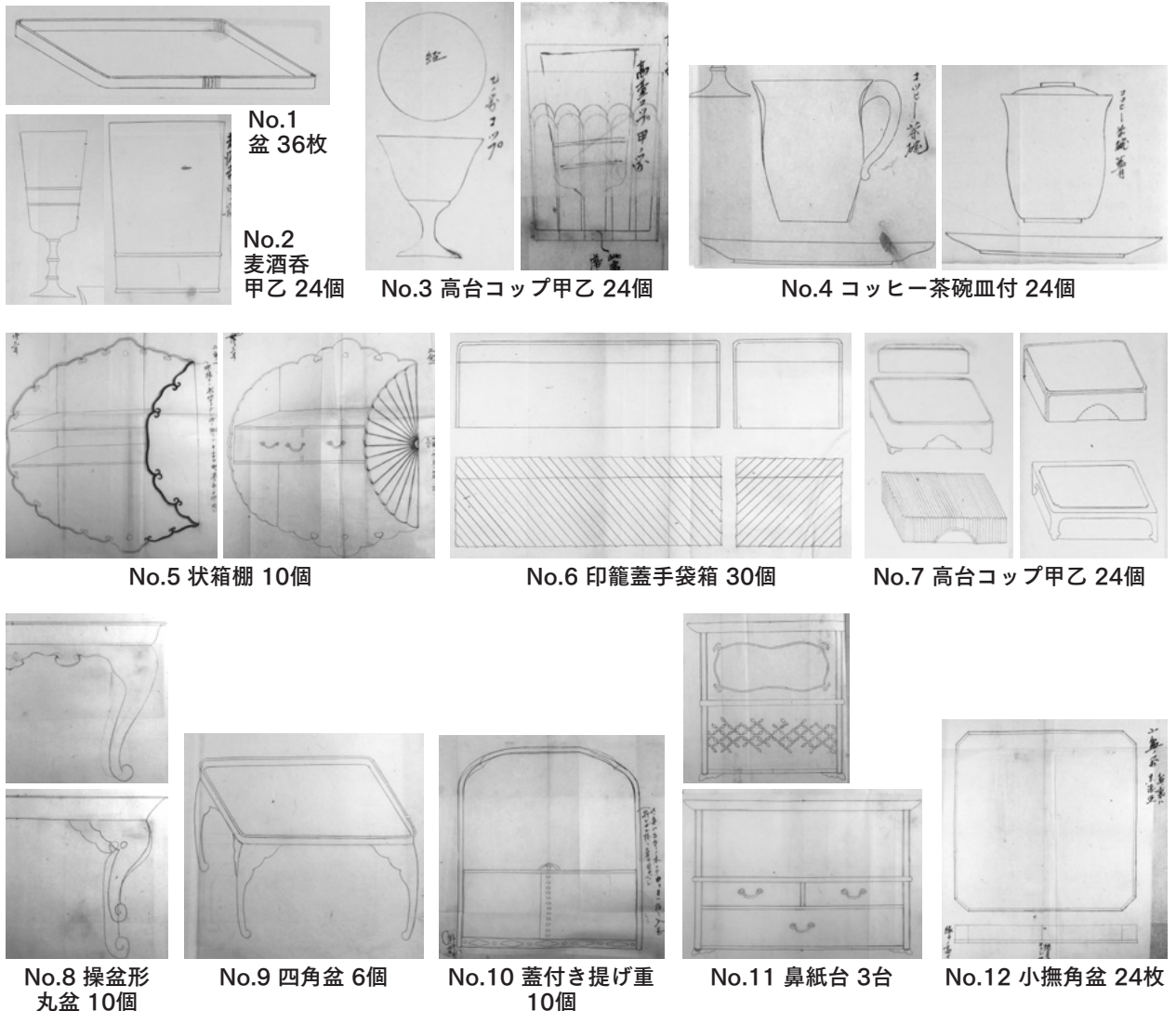
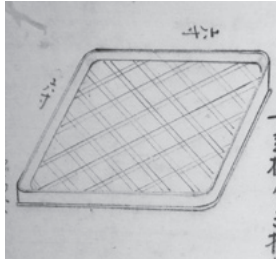
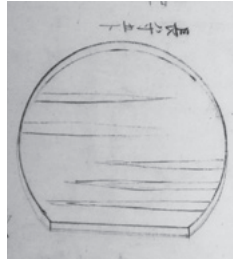


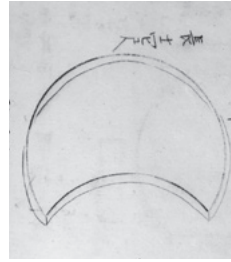
図6 事務局から注文された能代春慶の図案
「第二課諸務掛事務簿博覧会及雑ノ部 明治7年1月～明治8年12月」（秋田県公文書館蔵）



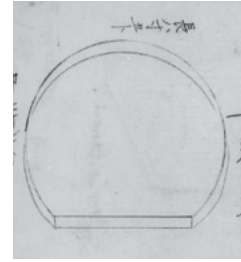
No.14 盆 24枚



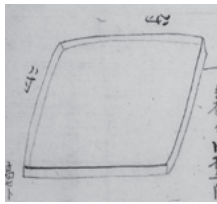
No.15 半月盆 40枚



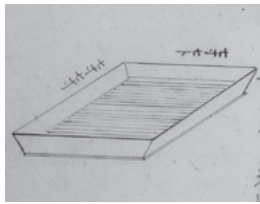
No.16 半月盆 20枚



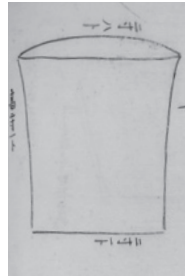
No.17 半月盆 2枚



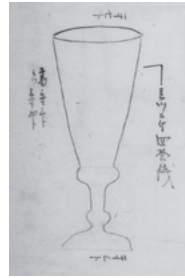
No.18 胴張盆



No.19 ソリ縁角盆4



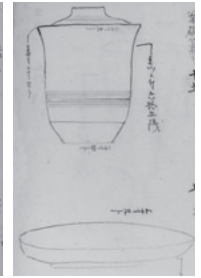
No.20 麦酒呑 18個



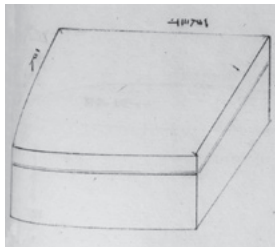
No.21 コップ 2個



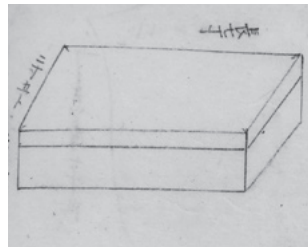
No.22 コffee茶碗皿 15個皿8枚



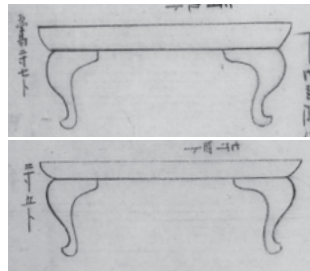
No.23 コffee茶碗皿 18人前付



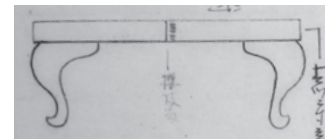
No.24 印籠蓋手袋箱 2個



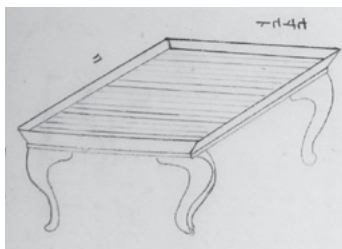
No.25 印籠蓋手袋箱料紙入れ 2個



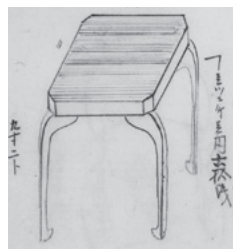
No.26,27 香台丸盆 2個



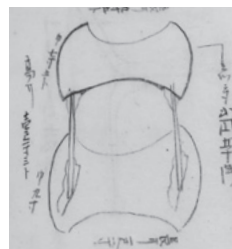
No.28 香台曲物縁丸盆 四つ足付 2個



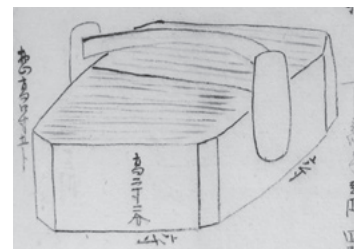
No.29 香台ソリ縁角 6個



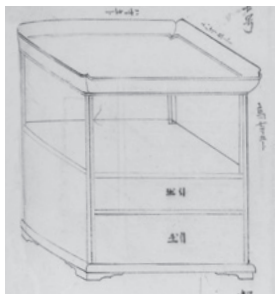
No.30 香台 2個



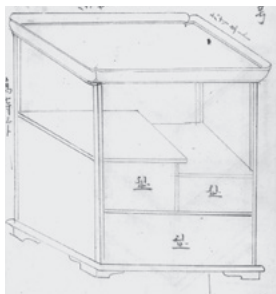
No.31 分銅香台 6個



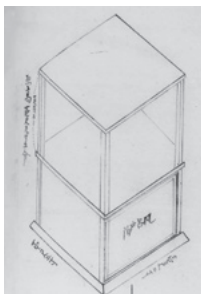
No.32 堤重 5個



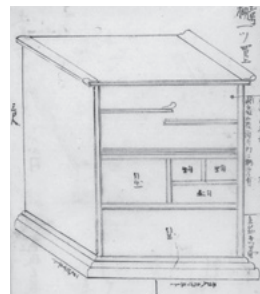
No.33 紙台 1個



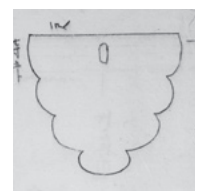
No.34 紙台 1個



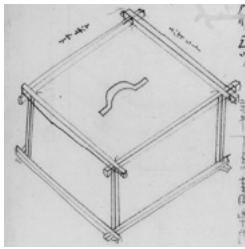
No.35 小袋棚 1個



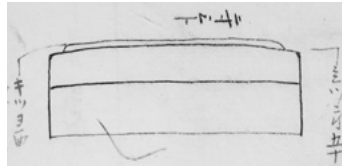
No.36 大棚 1個



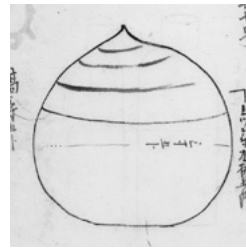
No.37 掛板 3枚



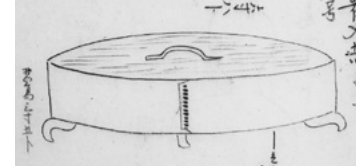
No.38 井戸形重 3個



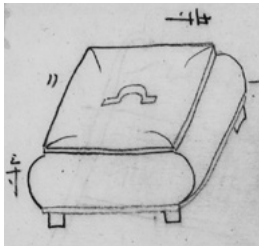
No.39 香合 12個



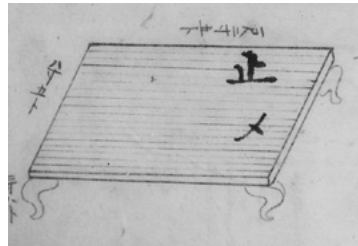
No.40
宝珠形菓子入れ 14個



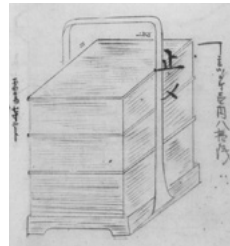
No.41 着入れ 5個



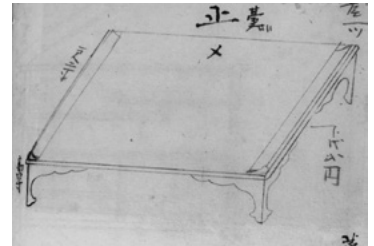
No.42 重 2個



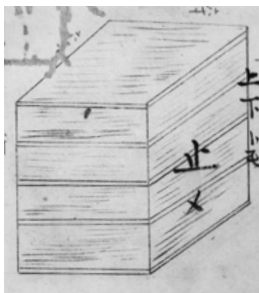
No.43 香台 6個



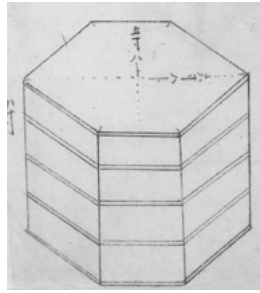
No.44 提重 2枚



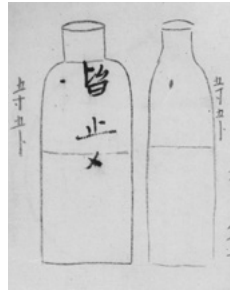
No.45 文台 1つ



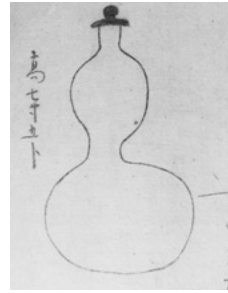
No.46 御重 3つ



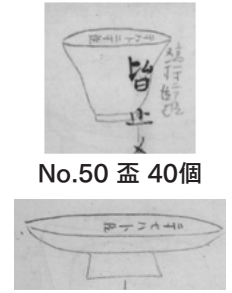
No.47 六角重 3つ



No.48 酒入 12本



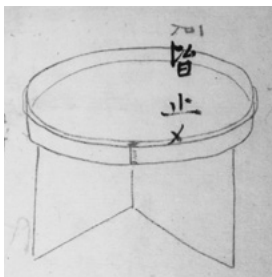
No.49 瓢 4つ



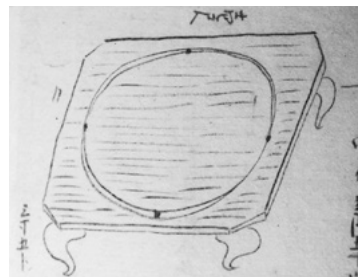
No.50 盃 40個



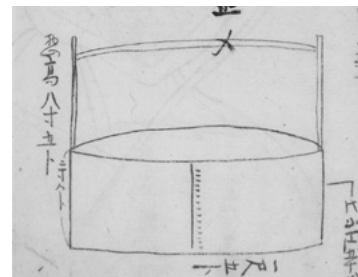
No.51 盃 20個



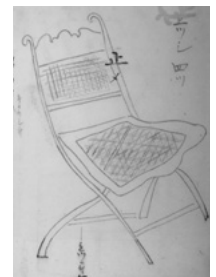
No.52 台 2つ



No.53 盆 2つ



No.54 曲物手つき 1つ



No.55 椅子 1つ

図7 石岡が事務局へ提出した能代春慶のデザイン画
「第二課諸務掛事務簿博覧会及雑ノ部 明治7年1月～明治8年12月」(秋田県公文書館蔵)

③注文書を確認した石岡は、事務局から送られた図面の製品は、今から製作したのではどうしても完成しないと判断する。そこで明治8年5月、手元にある製品の中から、注文を受けた図面に似たもの42品目について自らデザイン画を描き(図7)、それぞれに代金や品質といった情報を添えた書類を用意した。石岡のデザイン画は、能代市、県を通じて事務局へ届けられた。

④明治8年7月12日、事務局は県に対し、石岡が提出したデザイン画42品目のうち29品目(図7 No. 14～42)について、総額241円で買い上げる意向を示した。

①、②によれば、ウィーン万博を経験した事務局が、海外の人々が好むデザインを図案化し、職人へ送り指導しようとしたことが見えてくる。実際に、石岡庄寿郎の元へも春慶のデザイン画が送られている。しかし、春慶塗は重ね塗りを20回

以上行うため、盆一つを完成させるには3年ほどかかる（秋田県 2007）。事務局から図案が届いたのは4月、事務局への出品物の到達期限は9月上旬であり、とうてい完成には至らない。③からわかるのは、石岡は出品時期に新作の完成は間に合わないと判断し、手持ちの製品の出品について提案していることである。この製品は、事務局案と全く違うデザインというわけでもない。事務局からの注文図案（図6）と石岡が提出したデザイン画（図7）を比較すると、盆（No. 1）と小撫角盆（No. 12）、麦酒呑甲（No. 2）と（No. 20）、麦酒呑乙（No. 2）とコップ（No. 21）、コーヒー茶碗皿付（No. 4）とコーヒー茶碗皿（No. 22.23）、操盆形丸盆（No. 8）と香台丸盆（No. 26.27）、四角盆（No. 9）と香台ソリ縁角（No. 29）、蓋付き提げ重（No. 10）と曲物手つき（No. 54）はデザインが似通っている。このことから石岡は、ウィーン万博よりも精巧な品であること、海外向けのデザインであることなど事務局の意図を理解し、指導図案にできうる限り沿う形で手持ちの作品を出品しようとしていたことがわかる。

石岡は政府の要望に極力応えただけでなく、No. 31.38.40.41.42 にみられるようなオリジナルデザインも提案している。これらもまた事務局に認められ買上品に採用されている。一方で、採用されなかったNo. 43～55をみると、江戸時代に多く用いられたデザインの杯台や箱類などが多い。事務局がフィラデルフィア万博出品に求めたものは、伝統的な日本風デザインではなく、海外の人々の趣向や生活スタイルを意識したデザインであった。

能代春慶は、ウィーン万博に引き続きフィラデ

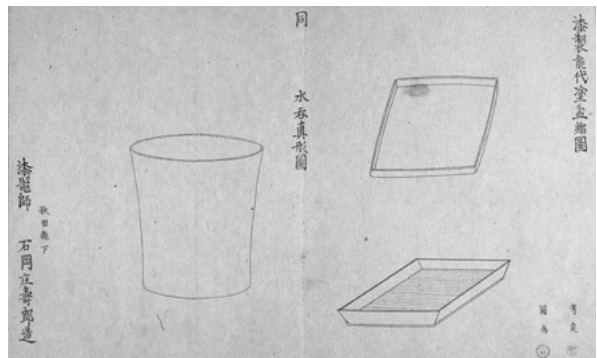
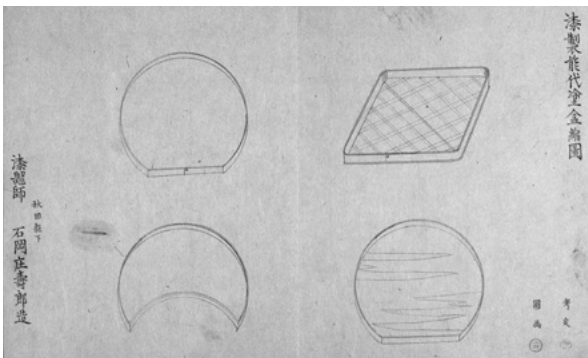
ルフィア万博でも賞牌を受賞した。その評価は、『米国博覧会報告書 第一 日本出品解説』で「春慶塗の中で最モ有名ナル者ハ羽後州秋田ヨリ製出ス又甚タ光沢アリテ美麗ヲ極ム」（註1）と記されるほどだった（米国博覧会事務局 1876）。

5. 温知図録へ掲載された石岡のデザイン画

事務局によるデザイン指導は全国で行われた。明治初期における国を挙げて実施された輸出向け工芸品生産事業の一端は、現在東京国立博物館に所蔵されている『温知図録』にみることができる。

『温知図録』とは、明治8年から14年頃にかけて作られた工芸品の手本を集めた図録のことをいう。内務省管轄の博覧会事務局と内務省製品画図掛の官員が考案して（註2）全国の工芸家に与えた図案または工芸家が提出した図案を、当時の画家が写筆した八十四帖からなる図案集である（東京国立博物館 1997）。万国博覧会やその後の内国勸業博覧会出品のため製作され、陶器や七宝、鋳物、木彫、鋳物、藤工芸、革類など種々の図案が掲載されている。

第四輯までである『温知図録』の内、第一輯はフィラデルフィア万博出品関連の図案が編集されており、その中に能代春慶の図案が含まれている（図8）。図8は左下に「漆器師 石岡庄寿郎造」とされており、石岡自身が考案した図案であることがわかる。これを図7の石岡が事務局に提出したデザイン画と比較すると、全点とも図7と統一のものが含まれており、また図7のうちNo. 14～42の買い上げられた製品が『温知図録』に収録されていることが分かる。描かれた製品の角度や模様、部品、細部のデザインに至るまで全て同じである。



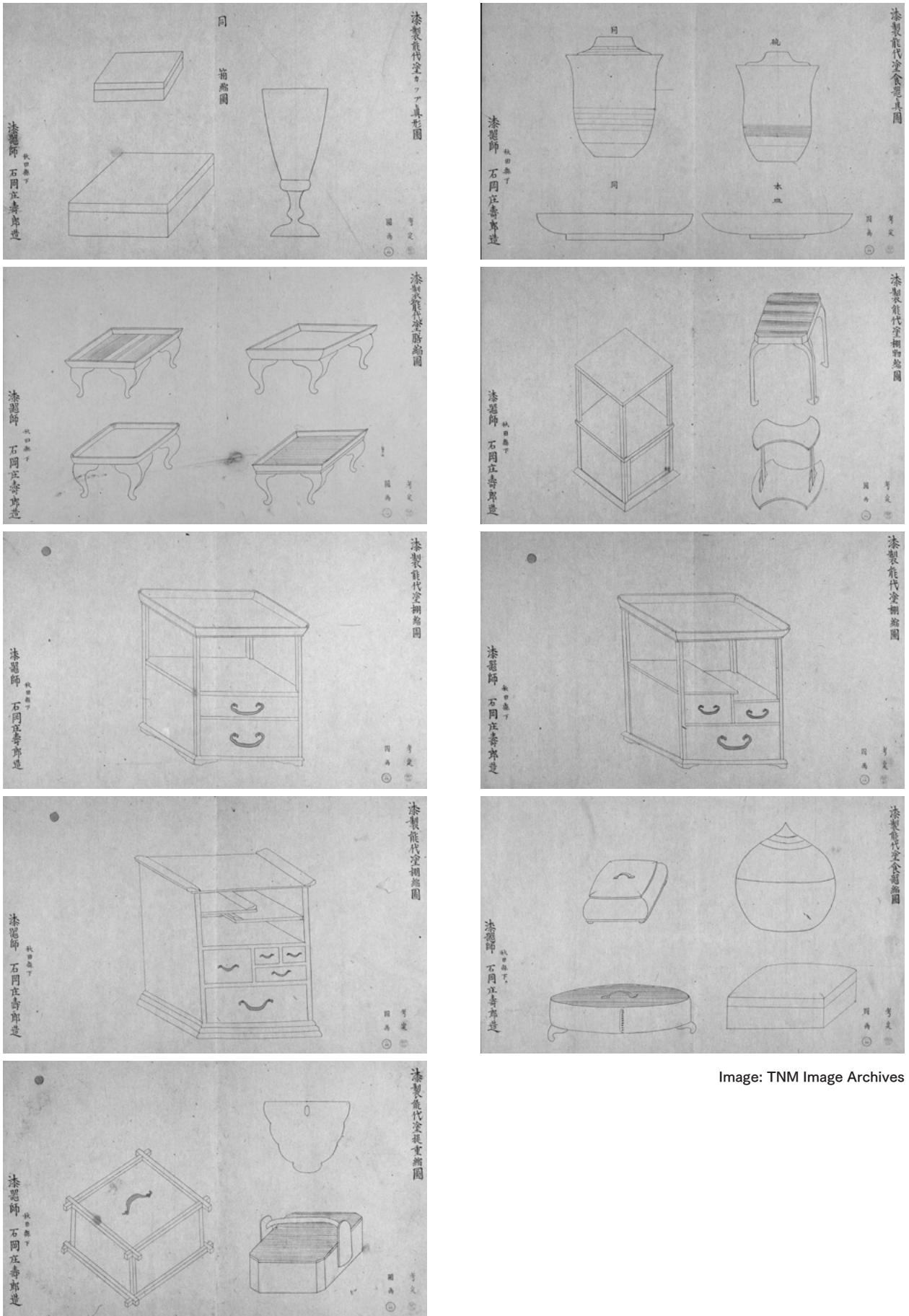


Image: TNM Image Archives

図8 『温知図録』(東京国立博物館蔵)に収められた能代春慶の図案

このことから『温知図録』に掲載された能代春慶の図案は、事務局が製作したものではなく、フィラデルフィア万博へ向けて石岡が考案したデザイン画が原図となったことが明らかとなった。第一輯第一巻目の前文（註3）には、フィラデルフィア万博に出品する作品の下図を作成して諸工に配付し、あるいは諸工の請求に応じて各工が作成した図案を修整した（東京国立博物館 1997）とあることから、『温知図録』が事務局のデザイン画ではなく、種類豊富でオリジナリティのある石岡のデザイン画を採用していたことがうかがえる。

おわりに

江戸時代の能代春慶は、藩の御用細工として位置づけられたため私売は禁じられ、武家の宴会や茶席等で入り用の品が多く製作された。明治期になると、能代春慶は国策として行われた万国博覧会への出品へ道を開いていく。貿易拡大を目的の一つに掲げた事務局は、欧米の需要に対応するよう、また出品物を買手の需要を考慮したものとするよう、全国の工芸職人へ働きかける。能代春慶の職人、石岡庄寿郎にもその通知が届いており、秋田県公文書館に残されているフィラデルフィア万国博覧会資料の中で、明治8年4月から7月12日までに事務局と石岡の間で交わされた文書は、博覧会出品のため、事務局が石岡へ行おうとしたデザイン指導の一環であったことが明らかとなった。

また、この時石岡が博覧会事務局へ提出した

42点のデザイン画のうち、フィラデルフィア万博出品用として買い上げられた29点は、『温知図録』に収められた能代春慶の図案と一致していた。図案は事務局の求めに応じ、欧米の人々の生活様式に即した器種を石岡自らが考案したものであった。

『温知図録』はフィラデルフィア万博後も、パリ万博や国内で行われた内国勸業博覧会に出品する際、デザインの参考として貸し出しなども行われ、輸出向け商品デザインの基準となった。能代春慶の図案が貸し出されたのかは定かではないが、能代市所蔵の能代春慶の中には、『温知図録』にみられるデザインに類似したものも多く現存しており（図2・図3・図9）、『温知図録』のデザインがその後も製品に活用されたことを示している。明治政府の殖産興業政策による事務局の行政指導があったとはいえ、時代の要望に合わせてデザインを変化させた、明治期の能代春慶職人の柔軟な姿勢が窺える。

（註1）『米国博覧会報告書 第一 日本出品解説』今此漆説ノ末ニ臨ンデ更ニ春慶漆ビ事ヲ記セントス 此漆ヤ素ト黄色にして透明ナルヲ以テ佛蘭西木器ノ如キ貨物ヲ製スルニ用ウ其法 先ツ礬漿ヲ木地ニ襯塗シ面ノ疎理（キメが粗い）ヲ填勻シ然シテ後ニ精磨時アリテ藤黄或ハ紅花及ビ柿油ヲ以テ著色トス 其光沢殊に鮮明ナリトス後チ剛毛ノ刷毛ヲ以テ漆液ヲ塗布ス 此液ハ予メ若干油ヲ混スルヲ以テ更ニ精磨ヲ待タズ只能ク之ヲ乾シテ充全ノ瑩澤ヲ放ツ此種ノ最モ有名ナル者ハ羽後州秋

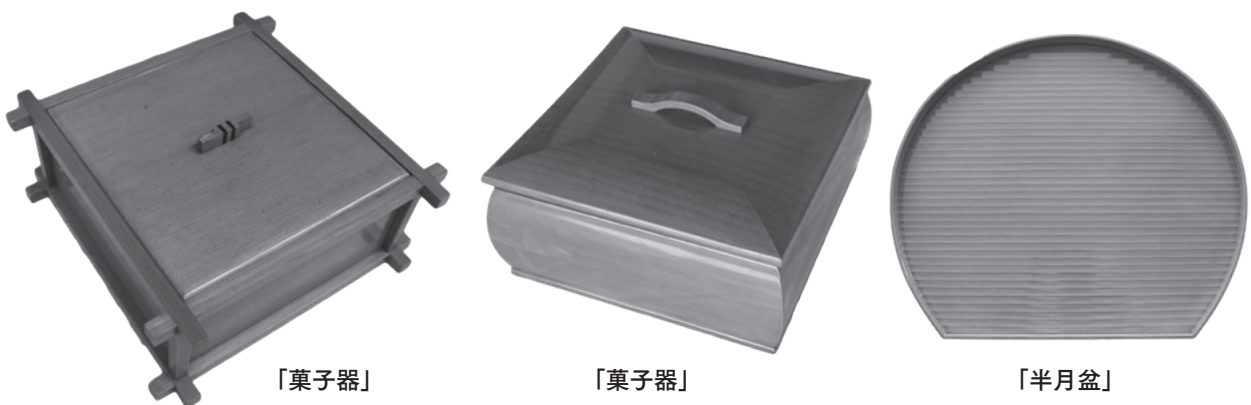


図9 フィラデルフィア万博に出品されたものと同じデザインの能代春慶（能代市教育委員会蔵）

田ヨリ製出ス又甚タ光沢アリテ美麗ヲ極ム而之ヲ製スルニ当テ塵ヲ避ケ且ツ其漆器ヲシテ多湿ノ氣中ニ乾定セシメンカ為メニ船ヲ海上ニ浮ベテ工ヲ其中ニ施スト言フ

(註2)『澳国博覧会参同紀要』によると、ウィーン博覧会を経験した政府の納富介次郎が、米国博覧会に出品する作品の図案を各出品人に下付すべきであると建言した。そして米国博覧会事務官となり十数名の画家を選び、多数の図案を作成して全国の著名な工芸家に配布したとある。

(註3) 第一輯の前文は次のとおりである。「温知図録 明治九年米国費府万国博覧会出品製ニ當テ画図ヲ製シ諸工ニ分与ス 又工手自ラ立按ヲ図シ刪生ヲ請フモノアリ 事務

官出品料長塩田真専任ス 事務官科員納富介次郎及岸光景中島仰山画工岸雪浦狩野雅信等從事ス 今其稿本ノ存スルモノヲ収メ之レヲ陶器七宝鑄物鍍鍛器藤細工刺繍紋氈染革合十類ニ分チ縮写ス蓋此図ヲ製スルヤ古画図中ニ就テ形容紋章ヲ搜索シ兼テ新意ヲ加フ故ニ名ヲ温知図録ト云 明治十年六月 事務官山高信離誌」

【引用・参考文献】

- 秋田県 1962『秋田県史 民俗工芸編』
秋田県教育委員会 1983『秋田の工芸技術』
秋田県教育委員会 1991『秋田県の諸職』
秋田県教育委員会 2007『あきたの工芸』
秋田県立博物館 2021『秋田県誕生 150年記念 特別展 佐竹氏遺宝展一守り継がれた大名家資料—』
角山幸洋 1999『研究双書第113冊 ウィーン万国博の研究』
半田市太郎 1962『秋大史学』「能代春慶塗概観」
半田市太郎 1970『近世漆器工業の研究』
伊藤真実子 2008『明治日本と万国博覧会』
國雄行 2010『博覧会と明治の日本』
田中芳男・平山成信 1897『澳国博覧会参同紀要』
東京国立博物館 1997『明治デザインの誕生—調査研究 報告書「温知図録」—』
能代市 2004『能代市史 特別編 民俗』
森山春雍 1897『澳国博覧会参同紀要』「澳国博覧会への参加方針」
米国博覧会事務局 1876『米国博覧会報告書 第1巻 日

本出品解説』

- 米国博覧会事務局 1876『米国博覧会報告書 第2巻 日本出品目録』
米国博覧会事務局 1876『米国博覧会報告書 第3巻 出品部』
米国博覧会事務局 1876「造家並ニ居家一般需要ノ家什及ヒ物具」『米国博覧会報告書 第一 日本出品解説』
能代市 1999『能代市史 資料編 近世—』「御用当座覚」
澳国博覧会事務局 1875『澳国博覧会報告書 澳国博覧会布告文』
「第二課諸務掛事務簿博覧会及雑ノ部 明治7年1月～明治8年12月」秋田県公文書館蔵
「第二課諸務係事務簿 博覧会社及雑ノ部 壹番 明治9年1月～10月」秋田県公文書館蔵
「第二課諸務係事務簿 博覧会社及雑ノ部 二番 明治9年6月～9月」秋田県公文書館蔵
「第二課諸務係事務簿 博覧会及雑ノ部 四番 明治9年11月～12月」秋田県公文書館蔵
「第二課諸務掛事務簿 博覧会及雑ノ部 貳番 明治10年6月～12月」秋田県公文書館蔵
「第二課事務簿 博物館ノ部 全 明治11年1～9月」秋田県公文書館蔵